【祇園会】

祇園会の山路に入るや大津籠　宗因
京を下に見るや祇園のゐひもせず　同
祇園会のけふによき名や心太　道彦
祇園会や神のまにまに手向山　如貞
祇園会や京は日傘の下を行く　吐月
祇園会や人をもる燈の薄ごろも　蓼太
祇園会やこれほどの人むさからず　同
祇園会や真葛が原の風かほる　鶴英
祇園会や僧の訪ひよる梶が許　蕪村
祇園会や空もかざりて雲の峰　同
祇園会やつかふ扇も山おろし　六柿
祇園会や似げなき児の花紅葉　洗市
祇園会や人の人中月出づる　北橘
祇園会やまことの山はかんこどり　一草
祇園会やとほ濁りせる京の空　如本
祇園会の人中にゐて人恋し　飴山實
祇園会の団扇を持ちてすたすたと　武藤紀子
祇園会の団扇もろうてまた歩く　近藤沙羅
祇園会や我も洛中図のひとり　小川もも子
祇園会と聞くだに熱くなる思ひ　飛岡光枝
祇園会や出番来し山大路へと　佐々木まき
祇園会や一生懸命山担ぐ　木下洋子
祇園会や鉾より山に親しみて　同
祇園会の松はるばると若狭より　同
祇園会や清めの雨の荒々と　本橋康子
祇園会やうすがき着たるたもとほり　中村汀
祇園会や神々ここに群がり来　川村玲子
祇園会も最後の鉾の過ぎし音　伊藤昭子
祇園会のその明け方の豪雨かな　田宮尚樹
祇園会は少年の日の祭かな　諏訪いほり
祇園会やおそろしいほど京は晴れ　東一爽
祇園会や真松の空晴れわたり　三玉一郎
祇園会や大き日除けの乳母車　梅田恵美子
祇園会や迷子めいたる田舎者　宮本みさ子
祇園会や真白き句帳おろさんと　同
祇園会の人をたぢろぐ電車かな　谷村和華子
祇園会の人にたぢろぐ老いしかな　澤田美那子
今年かぎり今年かぎりと祇園会へ　同
祇園会や深閑として京都御所　同
祇園会や古き名句のにぎはへる　北側松太
祇園会や今年はしづか東山　越智淳子
孫を得て迎ふ祇園会ことのほか　同
祇園会や輝いてゐる京男　氷室茉胡
祇園会やしうねき暑さ存分に　山田洋
祇園会の昔を語る京の人　花井淳
木下風民

【祇園祭】

とにかくに祇園祭の暑さかな　木下洋子
コロナ禍の今こそ祇園祭かな　同
大声で祇園祭の彼を呼ぶ
グエン・ヴー・クイン・ニュー
朝刊は祇園祭のことばかり　近藤沙羅
大雨の祇園祭となりにけり　山田寿美子
雨もよし涼しき祇園祭かな　山田洋
神も人も行きかふ祇園祭かな　伊藤昭子
こんぺいと祇園祭の京都より　長谷川櫂
みな同じ団扇見せあふ祇園祭　土佐欣也

【鉾祭】

三ヶ月を抜きし手拭ひ鉾祭　福林幸代
袴の腰の榊や鉾祭　同
語り継がんコロナの年の鉾祭　澤田美那子
灯されて駒形ちやうちん鉾祭　中野津久夫
屋根方は所在なさげや鉾祭　佐々木まき
天熱し地も又熱し鉾祭　同
鉾祭晴れたることを言ひ合へる　山田寿美子
海山の神やすらかに鉾祭　同
鉾祭先ぶれのごと燕とぶ　近藤沙羅
見たがりの子規にみせばや鉾祭　同
越の人相模の人や鉾祭　同
鴨川のあばれてをるや鉾祭　岩根壽美
兵児帯に結ぶ榊や鉾祭　角野京子
この国の厄払はばや鉾祭　山田蛍草
打ち水のみる間に乾き鉾祭　酒井きよみ
真つ青な竹切り出して鉾祭　北側松太
汗みづくなるがうれしき鉾祭　飛岡光枝
小夜ふけて名残りの笛や鉾祭　安藤久美
一泊の京の夜遊び鉾祭　稲垣雄二
しんがりで引く荷車も鉾祭　同
荒ぶれる山河鎮まれ鉾祭　坂元初男
降る雨は降るに任せよ鉾祭　石川桃瑪
古粽がさりと納め鉾祭　同
降るもよし晴れてなほよし鉾祭　三木紀幸
人垣に其角もゐたり鉾祭　木下洋子
京中の虫干ならん鉾祭　長谷川櫂

【前祭】

射干や静かにをはる前祭　上田忠雄

【後祭】

夏惜しむ心しみじみ後祭　藤英樹
けふからは違ふ暑さや後祭　上田忠雄

【鱧祭】

中買の声のきおへる鱧祭　飴山實
骨切のこつにぎやかに鱧祭　同
鱧祭をはつてからが鱧の旬　澤田美那子

【鉾立】

鉾立の固めの槌の響きけり　長谷川浩子
ゆさゆさと幣を揺らして鉾立てり　太田芳男
鉾建や真木は大路塞ぎたる　植田房子
鉾建や切られて開く縄の先　同

つぎつぎと鉾立ちあがる夏の月　同
みしみしと音たてて鉾立ちあがる　近藤沙羅
ゆさゆさと榊を揺らし鉾立てり　同
高きより榊ひとひら鉾立てり　同
鉾立や新縄のよき香りして　本橋康子
鉾建ての巻くや結ぶや二本縄　同
鉾建やまだ濡れてゐる榊の葉　同
きしみつつ長刀鉾は建ち上がり　山田寿美子
鉾建や真白き御幣散らしつつ　同
鉾立つや涼しき風のまた来たる　小川もも子
鉾立や荒縄道にどかと置き　同
次々と鉾立ちあがる大路かな　真鍋倭文子
長刀をゆらして鉾の立ちあがり　太田芳男
慈雨ならん鉾建の縄よくしまり　同
鉾建や花背の榊はこばれて　中村汀
鉾建つる蘇民将来子孫とぞ　同
而して鉾立ちにけり今年また　薮本文子
縄一本ゆるりと鉾は立ちにけり　澤田美那子
鉾建やかはらぬ手順今年又　同
芳しき新縄締めて鉾立ちぬ　岡田忠孝
行きずりの人も綱取り鉾立ちぬ　鎌倉英二
鉾建や平針に縄通しては　清田喜代子
鉾立や頭に巻いて豆絞り　山本華子
飴色の木槌かろがろ鉾立つる　同
ずたずたの世に鉾立てん山立てん　安藤久美
鉾立や長刀鉾に始まりぬ　氷室茉胡
東山きれいな空に鉾立ちぬ　上田忠雄
ふたとせの思ひの鉾を建てにけり　同
山鉾を建ててほんまの京の夏　坂元初男
ひつそりと鉾建つ年や祇園さん　花井淳
巡行の出番無けれど建つる鉾　氷室茉胡
鉾立や安堵歓喜の顔揃へ　同
素戔嗚の力をかりて鉾立てむ　上田悦子

鉾建や縄結ふ人の玉の汗　同
疫の世やしんかんと鉾立ち上る　飛岡光枝
ＯＬも幣をゆはへて鉾立つる　横山幸子
鉾建や散らかる縄も二年ぶり　同
青空に塩撒いて鉾立てにけり　木下洋子
鉾立の縄の切れはし貰ひけり　同
鉾立つて鉾に命の宿りけり　齋藤嘉子
鉾建てて真木に命宿りけり　辻奈央子
次の世は男に生まれ鉾建てん　中村汀
かうしてはをられぬけふは鉾立ぞ　酒井きよみ
ふくいくと香る新縄鉾立てり　玉置陽子
次々と空のまほらへ鉾建ちぬ　長谷川櫂
鉾立つや天地まぐはふ真柱　同
鉾の中の長刀鉾や立ちにけり　同
町ぢゆうに鉾立つ雨の晴間かな　同
鉾立や背にかけて縄ひきしぼり　同
鉾立や縄の切屑ちらばれる　同
炎天に鉾を建てねばならぬかな　同
炎天や鉾次々と建ち上がる　同
鉾建つや諸国の美田青々と　同
長刀を振りてよき鉾立ちにけり　同
三日月をかかげよき鉾立ちにけり　同
立ちならぶ鉾をよろこび燕とぶ　同
【鉾組む】
かろやかな木槌の音や鉾を組む　田中政子
百丈の縄の束据へ鉾を組む　田宮尚樹
鉾組むや縄もて縄をしごきつつ　中村汀
鉾組むや大槌の音ひびかせて　同
なほ女人禁制の鉾組み上がる　氷室茉胡
鉾を組むとりどりの縄躍らせて　福田弘子
組み上げし鉾を抜けては雀飛ぶ　長谷川櫂
【鉾起す】
仰向けて長刀鉾を起しけり　長谷川櫂

長刀を揺るがせて鉾起しけり　同
【山建】
山建てや松揺れながら町の空　長谷川櫂
一本の松を力に鉾立てり　宮本みさ子
【鉾蔵】鉾倉
鉾倉を開く祇園の祭かな　太田芳男
鉾の蔵がらんとなりて涼しさよ　本橋康子
鉾蔵や壁に立てかけ大車輪　中村汀
鉾倉をあけよ今年の風入れん　齋藤嘉子
鉾倉へ氷一塊運びこみ　山本華子
鉾倉に手枕をして三尺寝　同
鉾蔵に眠れるままや木と縄と　氷室茉胡
【鉾頭】
雲ふれんばかりに揺れて鉾頭　川村玲子
朝の日や錦でつつむ鉾頭　中村汀
立ち上がり日輪の辺へ鉾頭　同
【鉾柱】真柱
錦まくやうに縄まく鉾柱　岩根壽美
寝かされて龍のごとしや鉾柱　安藤久美
鉾柱揺れて洛中揺れにけり　山田寿美子
むくむくと夜の雲湧き鉾柱　北側松太
ゆふしでの榊涼しや鉾柱　長谷川櫂
花つけし榊をさはに鉾柱　同
立たざれば独活の大木鉾柱　同
【鉾の車輪】
金色の鉾の名ゆゆし大車輪　山田寿美子
さめやらぬ鉾の車輪の外さるる　花井淳
【鉾飾】
樟脳の匂ひ幽かや鉾飾　深沢孝位
まだ青き蘰もて鉾を飾りけり　小川もも子
胴懸けの瀑布のごとく懸かりけり　中村汀
【鉾の宿】
振舞茶合点用意や鉾の宿　木下洋子

【鉾人形】
鉾人形奥の蔵より出してきし　木下洋子
【神輿洗】
神輿洗ひ大松明が先づゆけり　木下洋子
雷の囃せる神輿洗ひかな　同
吾も受く神輿洗ひの一雫　本橋康子
加茂の水飛ばして神輿洗ひけり　同
鳴神を祓ひて神輿洗ひかな　上松美智子
しぶき上げ神輿洗ひの大榊　山本華子
大松明清めし路を神輿ゆく　長谷川浩子
腹巻に榊をさして神輿担く　真鍋倭文子
神の魂神輿に移す真暗がり　中西幸雄
神輿洗お先太鼓を打ち鳴らし　清田喜代子
神輿洗ひ水ふりかかるうれしさよ　澤田美那子
【神輿】
須佐之男の神輿荒ぶる炎暑かな　萬燈ゆき
素戔嗚尊といへる神輿ぶり　長谷川櫂
鈴鳴つて神がかりゆく神輿ぶり　同
おみこしにほいとほいととついてゆく　同
須佐之男命こかすな神輿ぶり　同
【裸鉾】
ひと雨を浴びて清しや裸鉾　植田房子
まつさらな縄の匂へり裸鉾　岩根壽美
長刀鉾まだ裸なる大路かな　小川もも子
縄の香をまとひて涼し裸鉾　上田忠雄
新縄の切り口熱し裸鉾　安藤久美
裸鉾はうきの音の清やかに　同
勇み立つ縄の薫りや裸鉾　川辺酸模
一風呂を浴びしごとくに裸鉾　木下洋子
だんだんに息づいてきし裸鉾　辻奈央子
藁縄の香り放つや裸鉾　花井淳
花散りし大樹の如し裸鉾　上田忠雄
美しきトルソー立てり裸鉾　越智淳子

新縄で締めてすがしや裸鉾　長谷川櫂
きりきりと縄で締めあげ裸鉾　同
【鷺舞】
夕涼や羽をひろげて鷺の舞　秋枝雪子
眦に紅の涼しき鷺の舞　澤田美那子
【曳初め】
船鉾に一雨ありてお曳初め　山本華子
曳初めや鉾より鉾を囃しては　上田忠雄
吾も今綱持つ一人お曳初め　大塚直子
祇園会の鉾曳き初めの園児かな　氷室茉胡
曳き初めの綱を握るも縁かな　木下洋子
曳初めの女子どもも底力　上田悦子
【鉾町】
鉾町に育ちし人を姑に持ち　中村汀
鉾町の生まれと言ひて気丈なり　同
鉾町や梅雨夕焼のその中に　同
鉾の町献燈当番貼つてあり　木下洋子
鉾町の誇りの空の粽かな　同
匂ひたつ榊横たへ鉾の町　上松美智子
鉾町に嫁ぎてともす祭の灯　山田寿美子
鉾町の大路小路や日が暮るる　同
鉾の町山の町とて歩きゆく　同
鉾町といふ乾坤のにぎやかな　唐振昌
家苞の掛香選るや鉾の町　山田蛍草
鉾町に生まれて鉾の奴かな　長谷川櫂
【鉾粽】厄除粽
鉾粽稲穂一すぢ混じりたる　本橋康子
鉾粽笹うつろなるをかしさよ　中村汀
花背よりとどきし笹や鉾粽　丹野麻衣子
いざ子らや鉾の粽を売りたまへ　同
三方に束ねては立つ鉾粽　岩根壽美
北山の杉の穂を挿し鉾粽　同
祇園会の厄除粽家苞に　薮本文子

鉾の子の腰にさしたる粽かな　近藤沙羅
なにもかも閉じ込め岩戸粽かな　上田忠雄
けさ秋やおくどさんにも鉾粽　山田寿美子
鉾粽家にいちばんよきところ　藤原智子
赤ん坊を抱いて祭の粽受く　諏訪いほり
畏みて我が家にかかぐ鉾粽　同
母のため夫のための鉾粽　齋藤嘉子
鉾粽求むマスクの人の列　木下洋子
早々と売切れ御免鉾粽　梅田恵美子
今年また恃む虚ろの鉾粽　安藤久美
結ひあげて指芳しや鉾粽　同
たれかれに今年も買はむ鉾粽　同
子どもらの唄は無けれど鉾粽　飛岡光枝
わが家を守りて古ぶ鉾粽　同
我が小さき厨守りぬ鉾粽　同
ふたとせの厄祓はんと鉾粽　曽根崇
祭より帰りて飾る鉾粽　小川もも子
手に受けて香りなつかし鉾粽　同
鉾ちまき掛けんきのふの懐かしや　同
百の母いよよ長寿を鉾粽　稲垣雄二
枯れ枯れて風より軽し鉾粽　同
もう一年我が家を守れ古粽　同
景気よしかかへていくつ鉾粽　上松美智子
笹の香や蘇民将来粽買ふ　同
誇らかに山一番の粽売る　澤田美那子
まだ残る笹の香りや鉾粽　横井初恵
三つ買へば三つそれぞれの鉾粽　石川桃瑪
長刀鉾のちまきで守れ門の口　北島正和
祇園会の粽の香る句会かな　同
一年の無事を納めん古粽　上田悦子
うつせみの鉾の粽の涼しさよ　長谷川櫂
加茂の母鉾の粽の笹を刈る　同
鉾粽なか虚ろなりつれなしや　同

かさこそと鳴るや去年の鉾粽　同
一年の塵からからと古粽　きだりえこ
鉾粽昔の家の香りかな　木下洋子
我が家の神の宿りて古粽　飛岡光枝

【祇園囃子】

鉾処々に夕風そよぐ囃子かな　大祇
鱧料る祇園囃の音の中　清水芳朗
祇園囃子豆腐の水にひびきけり　田中政子
京にゐて祇園囃子のただ中に　植田房子
地下街も祇園囃子や冷奴　木下洋子
祇園囃子はかなげにまた絢爛に　唐振昌
遠く聞く祇園囃子のはかなしや　山田寿美子
けふの宿祇園囃子のただ中に　大谷弘至
かんかんと照りゐる祇園囃子かな　北側松太
地下街も祇園囃子の流れけり　井上次雄
憂き身にも祇園囃子のひびきけり　西澤麻
香を買ふ祇園囃子を遠ざかり　斎藤真知子
昼寝覚はるかに祇園囃子かな　同
包丁で合ひの手入れん鉾囃子　越智淳子
夢に聞く祇園囃子や籠枕　上田忠雄
籠枕なごりの祇園囃子かな　同
胎内で祇園囃子を聞きしこと　氷室茉胡
旅人の背中へ祇園囃子かな　山田洋
奈落まで聞こゆる祇園囃子かな　同
小夜ふけて聞き入る祇園囃子かな　同
はかなしと聞き入る祇園囃子かな　長谷川櫂
青田風祇園囃子のわたりゆく　同

【鉾囃子】

祖父打ちし鉦孫も打つ鉾囃子　佐々木まき
夜は夜の音色となりて鉾囃子　山田寿美子
心急く四条烏丸鉾囃子　角野京子
囃子方尻を揺らして鉾の縁　氷室茉胡
炎天にすらりと立てて鉾囃す　大谷弘至

三年の昼寝から覚め鉾囃子　飛岡光枝
由良川の鮎も都へ鉾囃子　長谷川櫂
鉾囃子蕪村の家も遠からず　同
鉾囃子田楽をどりさながらに　同
田草とる手にも響くや鉾囃子　同
雨だれも鉾の囃子を奏でけり　同

【二階囃子】

夕立の中なる二階囃子かな　清水芳朗
遠雷や二階囃子のたけなはに　中村汀
こいさんもくはへて二階囃子かな　唐振昌
招かれて二階囃子のただ中に　上田忠雄

【こんちきちん】

友人の下宿にて聞くコンチキチン　平尾福
今年またひとりを悼みこんちきちん　飛岡光枝
コンチキチン金魚の水のゆれにけり　同
地下鉄は地の底深くこんちきちん　澤田美那子
昼間から鱧の落しでこんちきちん　同
荒梅雨の底とよもせやコンチキチン　齋藤嘉子
コンチキチン鳴らぬ京都の暑さかな　斎藤真知子
七月の京は朱色やコンチキチン　坂元初男
水槽の鱧が鱧噛むこんちきちん　同
二番目に好きな鉾来るこんちきちん　安藤久美
こんちきちんこんちきちんと氷水　沙海悠
鉾出会ふこんちきちんと囃しては　長谷川櫂
こんちきちん煮ゆるがごとき京都かな　同
鴨川の鰻も浮かれコンチキチン　稲垣雄二

【鉾の笛】

戦なき世に生まれきて祭笛　斎藤真知子

【鉾の鉦】

滅びゆく世界しづかに鉾の鉦　木下洋子
風流の鉦や太鼓やよーいやさ　きだりえこ
はればれと打ち納めけり鉾の鉦　中村汀
京都汗まみれ鉦の音鳴り止まず　三玉一郎

肩上げの浴衣少年鉾の鉦　飛岡光枝
打ち打ちていっせいに止む鉾の鉦　長谷川櫂
前後(さきあと)に分かれて涼し鉦の鉾　同
鉾の鉦この世あはれと叩きけり　同

【鉦の房】

鉦の房コンコキチンと飛びはねて　古志溢子

【戻り囃子】

はるかより戻り囃子の鐘の音　近藤沙羅

【鉾の稚児】

かしこくも羯鼓学びぬ鉾の児　召波
うす痘の見えずていとし鉾の児　几董
鉾に出た児によんべの夢問はん　比松
目ふたいで鉾下りにけり稚の親　大魯
我子にて候へあれにほこの稚　大江丸
鉾の稚児見据ゑてをりぬ東山　本橋康子
左右よりなさるるままに鉾の稚児　同
鉾の稚児煽ぐ大きな団扇かな　近藤沙羅
鉾の稚児扇のかげに休みゐる　同
鉾の稚児金の袂をひるがへし　同
かんばせのまことに白し鉾の稚児　秋枝雪子
鉾の稚児強力の背にけなげなり　山本華子
かつがれて鉾に乗る稚児尊しや　上松美智子
長刀鉾稚児の瑶珞ゆれどほし　坂口和子
むかし稚いまは笛吹く囃子方　坂元初男
かつがれし稚児ふりむくや鉾梯子　中西幸雄
恙なく注連縄断つや鉾の稚児　同
鉾稚児の上がりて梯子外しけり　清田喜代子
舞ふやうに注連切つて鉾の稚児　上田悦子
級友にはげまされゐる鉾の稚児　田宮尚樹
炎天に花と舞ひでて鉾の稚児　大谷弘至
鉾の稚児花より白く化粧して　上田悦子
身に余る刀抜いたり鉾の稚児　佐々木まき
上の子のけふは尊き鉾の稚児　中村汀

強力に稚児さらはれて鉾の上　長谷川櫂
冠の黄金ゆるるや鉾の稚児　高角みつこ

【鉾の笠】

今年また出番なかりし鉾の笠　木下洋子

【生稚児】

生稚児の身を投げ出すやあなかしこ　石塚純子
生稚児の凛々しく舞を納めけり　大場梅子
生稚児に仕へてをりぬ大団扇　山根雪
魂鎮めたまへ生稚児羯鼓打つ　諏訪いほり
強力の肩に生稚児大朝日　石川桃瑪
生稚児の舞ふや人形さながらに　川村玲子
生稚児を煽げや煽げ金扇　趙栄順
生稚児や人形よりもはかなげに　大谷弘至
生稚児の舞ふや錦の風の中　上田忠雄
灼熱の世へ生稚児の降りて来つ　田村史生
生稚児の少年の夏終りけり　同
生稚児よよき夫となれ父となれ　稲垣雄二
生稚児に切られて舞ふや花の綱　同
まぼろしの生稚児みゆる鉾の上　上田悦子
鉾おりる生稚児を待つ夏休み　同
涼しさや高きにござる稚児の顔　辻奈央子
生稚児やさぞや冠あつからん　近藤沙羅
生稚児は口引き結ぶ暑さかな　安藤久美
強力の肩に大輪花の稚児　坂元初男
生稚児にはるかなるかな鉾の道　澤田美那子
生稚児の母美しく控へをり　同
生稚児の今宵は母のふところに　藤英樹
生稚児もやがては人となるあはれ　同
生稚児の左右双子の禿かな　木下洋子
生稚児は水蜜桃の匂ひして　きだりえこ
生稚児の今は香屋の主かな　長谷川櫂
生ちごや命あるもの麗しく　同

【鉾の禿】

兄弟と生まれて鉾の禿かな　佐々木まき
賀茂茄子のやうな御顔の禿かな　藤英樹

【稚児人形】

稚児人形身をのり出して舞ひはじむ　石川桃瑪
稚児人形がたりと揺れて目覚むらむ　同
命なき稚児人形の涼しさよ　長谷川櫂

【宵山】

宵山や入り日まばゆき唐錦　収芋
宵山や草の匂ひの瓜供へ　岩根壽美
宵山や子供が売れる恋の護符　同
宵山や粽おひとつどうどすか　同
宵山や押されてのぼる鉾梯子　中村汀
しびれ京へのぼれやけふは宵山ぞ　同
宵山や大丸前で待ち合はせ　山田寿美子
宵山や駒形提灯花のごと　本橋康子
宵山や鷹の屏風を見にゆかん　同
宵山の高張一つ休み山　田宮尚樹
宵山の鉦の音こそ涼しけれ　佐々木まき
宵山や外郎売りの口上も　大場梅子
宵山の人波夜に入りけり　山本華子
宵山の山の灯れり潦　原田耕治
紫蘇もみし指そのままに宵山へ　横山幸子
宵山の灯に寝入りたる東山　鎌倉英二
宵山にすこしてれつつ帰省かな　夏井通江
宵山や糸屋格子の中にゐて　角野京子
宵山の襖の雨となりにけり　氷室茉胡
宵山や歩き歩きて涼みけり　越智淳子
宵山の地べたに座る青春よ　稲垣雄二
宵山の一夜の浴衣掛けてあり　同
胡瓜漬一本かぢり宵山へ　木下洋子
宵山や人とはぐれて人の中　同
宵山や団扇で我を呼ぶは誰　同
大丸で涼んではまた宵山へ　澤田美那子
宵山や光琳百花図踊り出づ　近藤沙羅
宵山や古琴一つ置かれあり　同
なつかしや宵山の灯も会ふ人も　安藤久美
宵山のなにがし寺の灯に会ひぬ　同
お清めの一雨浴びて宵山へ　越智淳子
宵山の熱川風にさましけり　神蛇広
宵山や笛の初めはゆるやかに　稲垣雄二
宵山の一夜の髪を結ひにけり　田村史生
宵山の酔ひのたちまち寿　土佐欣哉
宵山や漫ろ歩きの手に団扇　長谷川櫂
宵山の茹であがりたる顔ばかり　同

【宵宵山】

鉦方の一人は子供宵宵山　本橋康子

【宵山詣】

願ぎごとはひとつ宵山詣かな　中村汀

【宵の鉾】

見上ぐれば紙垂降るごとし宵の鉾　佐々木まき

【宵祭】

宵祭ちきりや町に仮寝して　川村玲子
屏風絵の千草吹かるる宵祭　本橋康子
先代の蟷螂も出て宵まつり　同
宗達の秋草に風宵祭　近藤沙羅
早くから浪速の客や宵祭　中村汀
南蛮寺跡を通りぬ宵祭　同
をとこなら笛方がよし宵祭　同
でで虫の香炉寂びたり宵祭　同
吉例の鮎菓子買はん宵祭　安藤久美
射干を活くるきほひも宵祭　同
今年また琴を飾りぬ宵祭　岩根壽美
水笛に水を足しけり宵祭　清田喜代子
青笹に包む氷餅も宵祭　飛岡光枝
秋草の小袖の揺れて宵祭　同
前の世は子の手を引きて宵祭　同

池田屋を襲ふころかや宵祭　坂元初男
誰彼の団扇の風や宵祭　橋詰育子
街路樹の雀ねむれず宵祭　三木桂子
宵祭惜しみて消えぬ提灯よ　稲垣雄二
乱れても帯は直さず宵祭　同
夜更けまで子ども遊べや宵祭　長谷川櫂

【屏風祭】
屏風祭紙燭ともしていざなへり　本橋康子
屏風祭昔々の明りかな　同
大格子外して屏風祭かな　中西幸雄
宗達の屏風を見たる祭かな　同
屏風祭屏風の前に琴ひとつ　氷室茉胡
招かれしごとくに屏風祭かな　岩根壽美
屏風祭秋草の絵の中にをり　橋詰育子
灯ともして祭る屏風の金と銀　澤田美那子
この家の奥の奥まで屏風祭　同
屏風祭閑の一字の軸の前　同
格子一枚吊り上げ屏風祭かな　上田悦子
屏風祭市中に山居あるごとく　河本豊

【屏風飾る】
風生まる屏風飾りの秋草に　大塚直子
飾りたる鷹の屏風の前にまた　長谷川櫂

【宵飾】
波に浮く崑崙山や宵飾　中村汀

【誰袖屏風】
今年また誰袖屏風みにゆかん　上松美智子
うるはしき誰袖絵図の屏風かな　坂元初男

【鉾提灯】鉾の灯
鉾提灯うつし世の闇照らしけり　中村汀
母ありし頃の灯の色鉾提灯　同
夕風や灯りそめたる鉾いくつ　佐々木まき
鉾灯る都大路となりにけり　川村玲子
鉾の灯や京の山々なほ暮れず　同

鉾提灯赤子の顔を照らしけり　神蛇広

【鉾みくじ】
鉾みくじ大吉と出てあなかしこ　上田悦子

【鉾見舞】
紅白の餅提げてゆく鉾見舞　清田喜代子
笹添へて氷一塊鉾見舞　玉置陽子

【鉾見台】
物干場に似て非なりき鉾見台　清田喜代子

【鉾見物】
鉾見物おんなじ辻をまた曲がり　長谷川浩子

【山鉾】
峯雲に鉾の切つ先とどきけり　山本華子
次に来る山鉾の名を言ふ子かな　木下洋子
山鉾の品定めする雨夜かな　本谷厚子
山鉾のあまた結び目美しき　西澤麻
山鉾のいづれ哀しき物語　萬燈ゆき
山鉾の渡らぬ夏の短かけれ　上田忠雄
東山に奉りてや鉾と山　きだりえこ
存分に山鉾洗へ今朝の雨　同
鉾のあとほつと一息山通る　澤田美那子
鉾と山すべて巡らむ心意気　氷室茉胡

【鉾】
鉾にのるひとのきほひも都かな　其角
鉾済むや流るるやうな人通り　鳳朗
夕涼の鉾中茶会ことのほか　中村汀
鉾高し東山より風吹いて　山田寿美子
高々と鉾の切先過ぎゆきぬ　元屋奈那子
大輪の華のごとくに鉾のあり　坂元初男
眺めては煽ぐ団扇の鉾の地図　氷室茉胡
鉾といふ鉾ふるひたつ夕立かな　安藤久美
行きも来もならぬ大路や鉾仰ぐ　同
大夕焼まぼろしの鉾立ちそろふ　同
来年は鉾巡り来よ冷し酒　上田忠雄

鱧食うてひととせ鉾を待たんとす　同
鉾のなき鉾の祭りも都ぶり　同
蔵開けてけさより鉾のお風入れ　同
たてよこに鉾見て歩く暑さかな　同
はなやかや二階を鉾にあけ放ち　同
鉾ゆくも止るも扇ひとあふぎ　同
いつまでも来るはずのなき鉾待てり　斎藤真知子
みちのくへ鉾のよき風送りたし　近藤沙羅
今か今かと鉾待つ夏のなつかしき　同
鉾たてぬといふといへども祭かな　同
疫鬼去れここは鉾道神の道　斎藤嘉子
この年はひとりで歩む鉾の道　飛岡光枝
幾たびも焼かれし鉾のゆらぎ出づ　同
鉾も人も白々とあり雨の中　同
目つむれば鉾誇らかに山涼し　同
鉾の人浴衣短く好もしく　澤田美那子
男らのみな嬉しげに鉾を守る　同
鉾幻山幻の大路かな　酒井きよみ
鉾は来ず手持ち無沙汰の大路かな　上松美智子
鉾無くて今宵の月のさまよへり　斎藤真知子
ざざ降りや鉾濡らさじと皆濡るる　上田悦子
今年また鉾に命を吹きこまん　福田弘子
空耳や去年の鉾の賑はひも　辻奈央子
世の塵を払ふがごとく鉾の紙垂　佐々木まき
老いてなどをれぬ今年も鉾を見に　同
祭鉾肩車の子に廻りけり　同
雨煙る都大路や鉾続く　小川もも子
穢れたるちまき戻るや鉾の函　河本豊
鉾きしむごとくにこの世きしみけり　宮本みさ子
鉾仰ぐ衆生を入れて大庇　長谷川櫂
鉾は舟町は海なりえんやらや　同
山鉾は草花ならん立ち並ぶ　同
鉾次々もう飽いてゐる舞妓かな　同

長き長き夢よりめざめ鉾動く　同
鉾ゆきて大路のこれる真昼かな　同
紅や炎天をゆく鉾の傘　同
泰平の地べたに坐して鉾仰ぐ　同
風神雷神走り来りて鉾囃す　同
雲割つて日よさしきませ雨を鉾　同
全共闘闘士なりしも鉾のひと　同
えんやらやえんやらやとや一生すぐ　同
【祭鉾】
祭鉾こぼれんばかり人乗せて　佐々木まき
祭鉾夏まで曳いてゆきにけり　横山幸子
祭鉾都大路をほしいまま　上松美智子
恍惚と雨しづくせり祭鉾　玉置陽子
【曳山】
曳山や姿よき松引き当てし　大場梅子
曳き山の松高々と吹かれけり　木下洋子
曳き山の松はこの世のものならず　長谷川櫂
【鉾提灯】
馴初は鉾提灯の小路とや　安藤久美
大丸の鉾の提灯すだれかな　長谷川櫂
【籤改め】
少年に籤改めは大仕事　石川桃瑪
進み出て籤改へ美少年　長谷川櫂
【鉾廻し】
鉾回し見んと人垣十重二十重　本橋康子
音頭取扇ひらりと鉾回す　同
雅とも雄々しとも鉾回しけり　藪本文子
鉾車心ひとつにして回す　木下洋子
男衆心一つに鉾回す　中西幸雄
どよめきや御池通りへ鉾廻る　中村汀
太き綱体に巻いて鉾廻す　伊藤昭子
洛中をとよもし鉾を廻しけり　小川もも子
鉾廻すお囃子方も身をよぢり　山根雪

ふんだんに水打ち据えて鉾回す　井上次雄
鉾廻す竹散り水散る上にかな　藤井洋子
鉾廻るささらの音もあはれなり　藤英樹
水の上また水打つて鉾廻す　同
雨の鉾水打たずとも廻りけり　同
雨の鉾こんなに軽く廻るとは　同
降りやまぬ雨を力に鉾廻す　田村史生
でで虫の力も借りて鉾廻す　きだりえこ
かたくなに廻らぬ鉾を廻しけり　長谷川櫂
ますらをに生れて鉾を回さんと　同
加勢して五百羅漢や鉾廻す　同
須佐之男の機嫌の鉾を廻しけり　同
鉾廻し六十余州廻しけり　同
長刀鉾扇の風に廻りけり　同
【辻廻し】
二ゆらぎ三ゆらぎ鉾の辻廻し　佐々木まき
鉾の月大きく揺れて鉾廻し　本橋康子
鉾先の大きく揺れて辻廻し　太田芳男
屋根方のふんばりどころ辻廻し　木下洋子
水撒けよもつと囃せよ辻廻し　坂元初男
今一度長刀鉾を辻回し　齋藤嘉子
玉の汗花と散らせて辻回し　上田悦子
四斗樽水うちまけよ辻廻し　石川桃瑪
【鉾の辻】
浴びせ打つ手桶の水や鉾の辻　角野京子
鉾の辻一筋避けてかき氷　佐々木まき
【鉾進む】
鉦房の揺れの揃ひて鉾すすむ　本橋康子
よういやさ扇返せば鉾すすむ　小川もも子
雷鳴のとどろく中を鉾進む　清田喜代子
鉾進む都大路に塩打ちて　中村汀
朝の日や木の音たてて鉾進む　同
音頭取返す扇に鉾進む　井上次雄

見送りは富士や孔雀や鉾すすむ　安藤久美
須佐之男の力を借りて鉾進む　大谷弘至
神となり仏となりて鉾すすむ　同
この年は心の中を鉾進む　稲垣雄二
幾万の団扇の風に鉾進む　辻奈央子
おそろしきこの世の果へ鉾進む　上田忠雄
鉾通るまこと金剛大車輪　澤田美那子
ゆりの木の青葉の中を鉾進む　角野京子
黄金の国の都を鉾すすむ　長谷川櫂
大水も地震ももものかは鉾すすむ　同
三日月を花とかかげて鉾すすむ　同
地より湧く炎の中を鉾すすむ　同
【鉾巡行】
鉾巡行までは静かな京の朝　鎌倉英二
【鉾曳く】
寿鉾ひく人も見る人も　植田房子
箱舟のごとくに鉾の曳かれゆく　中村汀
炎天の辻より鉾を曳き出す　同
塗笠のみなきらきらと鉾を曳く　大谷弘至
炎天を揺らしては鉾曳き廻す　同
鉾を曳く笠の下なる玉の汗　同
白足袋の熱しと鉾を曳くことよ　齋藤嘉子
鉾曳きの草鞋ちぎれて花の塵　上田忠雄
イタリアの婿来て鉾を曳きにけり　沙海悠
鉾曳くや在所は瓜の花ざかり　長谷川櫂
もの狂ふごとくに鉾は曳かれゆく　同
天竺の鬼も来たりて鉾を曳く　同
生れきて鉾曳く玉の命かな　同
笠一つかぶりて鉾を引く人よ　同
栂尾の猿も兎も鉾を曳く　同
こぞり来て茄子も南瓜も鉾を引く　同
鉾を曳き回してその夜妻抱く　同
男の子らの鉾曳きまはす祭かな　同

笠を着て猿も兎も鉾を曳く　同　大谷弘至
洛中を鉾曳きまはす遊びせん　同　澤田美那子

【鉾通る】

大丸の孔雀のまへを鉾とほる　萬燈ゆき　同
開け放つ二階の前を鉾とほる　同　斎藤真知子
鉾の後しづかに山の通りけり　山田寿美子　同

【鉾動く】

鉾動く大き車を軋ませて　斎藤真知子　同
昨日まで立ちゐし鉾のみな動く　田宮尚樹　同
大綱を声高らかに鉾動く　坂元初男　同
人々の願ひ重たし鉾軋む　福田弘子　同
氷水あちこちに鉾動くかな　長谷川櫂　同

【鉾来る】

天に熱地に熱いよよ鉾来たる　大谷弘至　大谷弘至
颯爽と鉾来て止る団扇かな　上田忠雄　上田忠雄
鉾めぐりくるに間のある麦茶かな　植田房子　植田房子

【鉾とぎる】

巡行の鉾のとぎるる暑さかな　橋詰育子　大辻はいよよざざ降り鉾を待つ
次々と鉾とどこほる暑さかな　横山幸子　大辻はいよよざざ降り鉾を待つ

【鉾の列】

八坂まで一目千両鉾の列　上松美智子　【鉾の奴】鉾の衆
炎帝の力のかぎり鉾の列　同　鉾の衆今年揃ひのマスクせり

【鉾の道】

辻といふ難所ありけり鉾の道　清田喜代子　鉾衆に氷室の氷差し入れよ
注連縄を切つて鉾道開きけり　同　我もまた鉾の奴といふべしや
粛々と八坂へつづく鉾の道　趙栄順　ここに又鉾の奴や松選び
大水のあとの酷暑や鉾の道　木下洋子　鉾陰にひと休みして鉾の衆
鉾の道絹の道より続きけん　稲垣雄二　鉾衆のどやしどやされ鉾立ちぬ
鉾の道富貴の家の並びけり　長谷川櫂　同　【鉾団扇】
雲の峰はるかに鉾の道はあり　同　鉾車大きく描かれたる団扇
鉾の道ちよつとはづれて末富に　同　音頭取金の団扇の裏は銀
恐るべき未来へつづく鉾の道　同　もみくちやの宵山をゆく団扇かな

【鉾を待つ】

句の縁かりそめならず鉾団扇　大谷弘至　大谷弘至
生稚児に絶えずまゐらす団扇風　佐々木まき　澤田美那子
おそろしき恋かもしらぬ団扇かな　横井初恵　同

【長刀鉾】

人を待つ長刀鉾の立つところ　唐振昌　同
長刀鉾ひとつ揺らぎて動き出づ　中村汀　斎藤真知子
高々と長刀鉾をとんぼとぶ　山田寿美子　同
長刀鉾飛行機雲のすぐそばに　田村史生　木下洋子
長刀鉾命の綱の見え隠れ　本橋康子　同
長刀鉾廻り切つたるところかな　趙栄順　長刀鉾俳諧の鬼これにあり
長刀鉾しなひて天をわたりゆく　上田悦子　長刀鉾見えそめしよりはるけしや
まほろばや長刀鉾の立ち上る　中村汀　誇り高き長刀鉾や動かざる
長刀鉾千年万年囃すべく　井上次雄　長刀鉾今年の出水手強いぞ
狂ほしく長刀鉾を追うてゆく　上田忠雄　今年また長刀鉾にまみえけり
我もまた長刀鉾につき行かん　原田耕治　疫を切る長刀鉾の太刀いづこ
切り進む長刀鉾や京の空　萬燈ゆき　長刀鉾この世の厄を払ひつつ
鳩舞ふや長刀鉾の空青く　横山幸子　白玉や長刀鉾がすぐそこを
仮の世の長刀鉾に登りけり　清田喜代子　長刀鉾睨みきかせて立ち上がる
上がることかなはぬ長刀鉾仰ぐ　山根雪　長刀鉾建ちて恐るるものはなし
長刀鉾すつくと雨を打ち払ふ　橋詰育子　まほろしの長刀鉾来る大路かな
まさしくや長刀背負ふ長刀鉾　藤原智子　長刀鉾深く息して動き出づ
諏訪いほり　長刀鉾立ちて大路を払ひけり
同　長刀鉾蕪村住みにし町を往く
小川もも子　長刀鉾豊穣の雨浴びながら
井上次雄　長刀鉾長刀ゆらし大路来よ
佐々木まき　長刀鉾雲のひとつも寄せつけず
山田蛍草　長刀鉾少し傾く暑さかな
金澤道子　時は今長刀鉾の立ち上がる
阪ひとし　長刀鉾青青と空を揺らしけり
東一爽　こちらと長刀鉾へ渡る橋
長刀鉾熱気に鉾の縄ゆるぶ
長刀の光こぼしつ鉾立てり
遠ざかるほどに大きな長刀鉾
息を吹きかへし長刀鉾は立つ
長刀鉾ざざ降りの中やつて来る
朝風の晴れがましさや長刀鉾
長刀鉾富士より高く聳えけり
山は富士鉾は長刀こんちきちん
正面に炎のごとし長刀鉾
仰ぎ見む長刀鉾は雲の中
いま過ぎてはるかかなたへ長刀鉾
京の夏長刀鉾の立ちてより

人殺す長刀ならず長刀鉾　坂元初男
雨の粒長刀鉾にそうて落つ　長谷川櫂
長刀鉾切尖のまづ夕映えて　同
長刀鉾ぐらりと揺れて動き出づ　同
長刀を揺らして鉾はうるはしき　同
往きあぐむ長刀鉾を囃しけり　同
長刀鉾轢きしだかるる何々ぞ　同
炎天へ長刀鉾は揺らぎ出づ　同
長刀鉾灼けて長刀立てゐたり　同
長刀鉾からくれなゐのただならね　同
鳴神も長刀鉾を囃しけり　同
長刀鉾道のはたてに現れつ　同
長刀鉾はるか月鉾みやりつつ　同
長刀鉾扇の風に廻りけり　同
長刀鉾都の空を欲しいまま　同
長刀を揺らして鉾は近づき来　同
身を揺りて長刀鉾はゆきなづむ　同
長刀鉾東西南北みなはるか　同
長刀鉾の切尖みゆる夜空かな　同
雲の中ぬつと長刀鉾はあり　同
鉾いろいろ長刀鉾にしたがへり　同
長刀鉾この世をすぐるごとくすぐ　同
長刀鉾太陽の前に曳き出しぬ　同
やや反りて長刀鉾の美しき　同
長刀鉾いろいろの紐おもしろや　同
尻重き長刀鉾をえんやらや　同
長刀鉾胴ぶるひして動き出づ　同
長刀鉾鬼の力の鉾車　同
人々の嘆きの海へ長刀鉾　同
立たずとも長刀鉾は美はしき　同
長刀鉾大沈黙の動き出づ　同
長刀鉾人に生まれて仰ぎけり　同
長刀鉾炎となりて進みゆく　同

金襴の揺らめき立つや長刀鉾　同
みな捨ててついてゆきたし長刀鉾　同
右左より迫れる軒を長刀鉾　同
台風を睨みつけては長刀鉾　同
須佐之男の泣きじやくる雨か長刀鉾　同

【一の鉾】

乾坤をよぎるくれなゐ一の鉾　近藤沙羅
さまざまな山鉾あれど一の鉾　山田蛍草
陽炎となりてはるかへ一の鉾　田村史生
乾坤の軋みて一の鉾回る　同
観衆も共に回さん一の鉾　同
熟寝子やいつかはひけよ一の鉾　安藤久美
稚児といふ花をゆらせて一の鉾　坂元初男
天に雲生まれ出づるや一の鉾　神蛇広
須佐之男命よろこぶ一の鉾　長谷川櫂
須佐之男の乗つて軋ます一の鉾　同

【月鉾】

月鉾の出づるは山のあはひかな　季吟
月鉾や児の額の薄粧　曽良
月鉾や人声起る山かづら　暁台
月鉾の月しらしらと朝空に　本橋康子
月鉾の月桐箱に納めあり　同
雨あがり月鉾の灯の涼しさは　岩根壽美
月鉾へ上り都を眺めけり　野田翠
月鉾や縄美しく巻き上げて　木下洋子
雲とほる月鉾の月翳らして　藪本文子
月鉾に宵の明星添ひにけり　中村汀
月鉾をまるごと洗ふ大夕立　同
雨のあと月鉾に灯のともりけり　斎藤真知子
月鉾の月もかくるる雨夜かな　横山幸子
涼しさや月鉾の上にけふのぼり　潮伸子
月鉾も長刀鉾も夕立かな　橋詰育子
月鉾の提灯ともる白雨かな　川村玲子

月鉾に昇り応挙の草花見ん　坂元初男
月鉾に登らん長き列の中　澤田美那子
月鉾に登ればはるか西東　同
就中月鉾ぞよき破風飾　同
月鉾は十一トンやはしけやし　本谷厚子
月鉾や月一文字すずやかに　吉澤花
月鉾や今宵の月を友として　上田悦子
月鉾に登るや長き列につき　大場梅子
にぎやかに囃して上げん鉾の月　上田忠雄
なにはともあれ月鉾を仰ぎ見る　山本華子
月鉾の月に風吹く夕べかな　氷室茉胡
月鉾の鉾先ゆれて雲静か　鎌倉英二
夕空に高く影して月の鉾　岩井善子
つゆ弛びなく月鉾に縄からむ　石川桃瑪
月鉾やしづかなる月宿しゐて　大谷弘至
眠りよりさめて大輪月の鉾　飛岡光枝
月鉾の奴となりて寿　同
月鉾の月の良夜となりにけり　藤英樹
スサノオの兄とはゆかし月の鉾　同
満天の星に眠るや月の鉾　川辺酸模
月鉾の月の埃は払はれず　稲垣雄二
月鉾は月に供ふる花ならん　近藤沙羅
たをやかに月をゆらして月の鉾　きだりえこ
月鉾の月を下ろしてしまふのか　安藤久美
よぎりゆく月鉾見えし小路かな　長谷川櫂
月鉾に仕ふる月の奴かな　同
月鉾に灯の入るころのよかりけり　同
月鉾や草花の露揺るるらん　同
月鉾やふりさけ見れば東山　同
月鉾をまことの月の照らしゐる　同
月鉾の月ひらひらと炎天に　同
月鉾を仰ぎて君も月の人　同
月鉾や月を宿して花やかな　同

鴨川の河童も曳くや月の鉾　同

【船鉾】

ざざ降りや船鉾は川渡るごと　同

船鉾を流さんばかり大夕立　斎藤真知子

船鉾へ波のやうなる東山　近藤沙羅

船鉾の幟はためく大路かな　中村汀

胴ぶるひしつつ船鉾わたりゆく　同

船鉾の舵は扇にまかせけり　同

船鉾に上りきらざる園児かな　山根雪

船鉾の波たててゆく涼しさよ　清田喜代子

むくむくと船鉾を追ふ峰の雲　上松美智子

しんがりの船鉾送り句会へと　田村史生

びしよぬれの船鉾重し辻廻し　同

船鉾のうしろ姿を惜しみつつ　上松美智子

【大船鉾】

凱旋の大船鉾の唐櫃や　澤田美那子

しんがりは大船鉾の唐櫃よ　木下洋子

大船鉾潮もかなひぬ漕ぎ出でな　安藤久美

【鶏鉾】

鶏鉾回しすぎたるをかしさよ　角野京子

鶏鉾こどもの綱に曳かれけり　同

鶏鉾車裂けたる暑さかな　長谷川櫂

【菊水鉾】

天に咲く菊水鉾の菊一輪　本橋康子

雨の中菊水鉾を見るまでは　安藤久美

天駆くる菊水紋の鉾頭　馬淵可奈

蜻蛉とぶ菊水鉾のてつぺんを　近藤沙羅

したたるや菊水鉾の菊の露　諏訪いほり

菊水鉾菊の雫を滴らす　藤英樹

菊水鉾われにもくれよひと雫　橋詰育子

金色の菊したたるや菊水鉾　飛岡光枝

菊水鉾旱の空に花開く　同

菊水鉾孔雀を瀧と垂らしけり　長谷川櫂

菊水鉾ゆらりと菊の姿かな　同

いつせいに白きからかさ傘菊水鉾　同

【函谷鉾】

都ごと曳いてゆくなり函谷鉾　安藤久美

麻裃よき男らや函谷鉾　上松美智子

いち速く立ちて涼しや函谷鉾　横井初恵

【四条傘鉾】

四条傘鉾風のごとくに廻りけり　藤英樹

風流の棒一本を振り踊る　長谷川櫂

【芦刈山】

閑かなり葦刈山の立つあたり　本橋康子

古り古りし小袖床しや芦刈山　同

行き止まり芦刈山の灯は冥し　岩根壽美

芦刈山賤男は芦刈りにけり　中村汀

一番の山は芦刈鉾は月　同

芦刈山小袖たふとく祭られて　伊藤昭子

芦刈山雲足早くなりにけり　植田房子

芦刈山身につまさるる齢かな　横山幸子

人混みを避けて芦刈山の灯に　澤田美那子

思ひ出の箱の中から芦刈山　同

また妻と芦刈山を見てゐたり　三玉一郎

夫婦和合の粽求めん芦刈山　氷室茉胡

見るだけで涙ながるる芦刈山　横山幸子

我もまた芦刈山にゆかりあり　長谷川櫂

その昔男ありけり芦刈山　同

芦刈山我も翁となりにけり　同

その人に芦刈山のよき句あり　同

賤の男の話きかせよ芦刈山　同

一切は夢と思へど芦刈山　同

【蟷螂山】

飛ぶ翅のみどり美し蟷螂山　本橋康子

蟷螂山鎌振り上げて喜ばれ　木下洋子

新しき胴懸けうれし蟷螂山　中村汀

蟷螂山頭もたげて翅ひろげ　堀野英子

蟷螂山なごりの羽をひろげたり　丹野麻衣子

蟷螂山けふはかまきり機嫌よき　横山幸子

蟷螂山今宵は翅を休めをり　坂口和子

蟷螂は山の行く手を祓ひつつ　角野京子

蟷螂山さても夜風に飛びさうな　石川桃瑪

炎天にかつと見ひらき蟷螂山　伊藤昭子

この国の青田の色の蟷螂山　石塚純子

蟷螂山ただならぬ世に羽広ぐ　藤英樹

蟷螂山斧に闘志のあるごとく　佐々木まき

はばたいて暑さを払ふ蟷螂山　上田忠雄

蟷螂山三年ぶりに羽広げ　安藤久美

蟷螂山金のまなこに雲の峰　田村史生

蟷螂の広げぬ翅へお風入れ　上田悦子

見送りの翅涼しけれ蟷螂山　花井淳

蟷螂山蟷螂どこへ飛びゆきし　斎藤真知子

京女一番好きは蟷螂山　上松美智子

羽休め無聊をかこつ蟷螂山　同

愛想よく蟷螂山の来たりけり　三玉一郎

蟷螂山一番の羽広ぐ　飛岡光枝

蟷螂山声かけられて右左　辻奈央子

よろこびの翅をばたばた蟷螂山　山田洋

蟷螂山また千年を青々と　坂元初男

赤ん坊の立つて喜ぶ蟷螂山　長谷川櫂

【木賊山】

ものがたり聞けば哀しや木賊山　本橋康子

あをあをと木賊植ゑたり木賊山　近藤沙羅

四五人の男が立つる木賊山　岩根壽美

木賊山この世の木賊一束　丹野麻衣子

老いて待つ二年は長し木賊山　澤田美那子

訪ね来て浮世の外れ木賊山　上田忠雄

淋しさの果てにありけり木賊山　山田洋

【岩戸山】

岩戸山近江の松を美しく　佐々木まき
この先の道のくらがり岩戸山　岩根壽美
高々と鉾にも似たり岩戸山　本橋康子
石持に石ざくざくと岩戸山　上田忠雄
生も死も同じ暗闇岩戸山　同
うつて出んこの世の闇へ岩戸山　上田悦子
くら闇をくだく太鼓や岩戸山　同
【孟宗山】
あらためて亡き父母偲ぶ孟宗山　太田芳男
孟宗山雪おく松を炎天に　藤英樹
孟宗山の雪のかけらが飛んで来し　横山幸子
炎天の雪を香らせ孟宗山　澤田美那子
この暑さ孟宗山の雪浴びん　上田悦子
うだる世へ雪を一掻き孟宗山　安藤久美
孟宗山松に真夏の雪つもる　長谷川櫂
【鯉山】
鯉山の鯉の跳ねたる暑さかな　本橋康子
雲の峰鯉山の鯉はねながら　木下洋子
鯉山の鯉は炎の風に跳ね　坂元初男
鯉山や鯉を誇りの男ぶり　石川桃瑪
鯉山の鯉となりたき暑さかな　上田忠雄
鯉山の大きな鯉や滝上る　横井初恵
鯉山の大鯉のぼる虚空かな　上田悦子
【行者山】
護摩を焚く煙の中から行者山　木下洋子
【太子山】
押し立てて比叡の杉や太子山　本橋康子
あをあをと杉の若木や太子山　同
子の授くる知恵の守りも太子山　木下洋子
世にひびく錫杖の音太子山　飛岡光枝
【保昌山】
保昌山見送りてまた会ひにけり　上田忠雄
妻愛すこともたいへん保昌山　藤英樹

ひそと買ふ保昌山の恋みくじ　夏井通江
保昌山恋の粽の軽きこと　稲垣雄二（きだりえこ）
君に買ふ保昌山の粽かな　長谷川櫂
梅一枝愛しき人へ保昌山　同
保昌山恋の力で動きけり　同
【霰天神山】
霰天神松の緑の美しく　佐々木まき
霰天神山粽かけばや軒先に　坂元初男
【黒主山】
茄子かぼちや黒主山と彫られあり　大場梅子
仰ぎみる桜のよけれ黒主山　上松美智子
善人の顔して涼し黒主山　上田悦子
山壱番黒主山へ大かぼちや　飛岡光枝
【占出山】
安産の山が一番占出山　佐々木まき
占出山祝ひの鮎をいただかん　上田悦子
生むが安し山一番の占出山　安藤久美
【鈴鹿山】
鈴鹿山人が担ひて曳きまはす　唐振昌
【南観音山】
あばれきて南観音山涼し　丹野麻衣子
軒蹴つて南観音山あばれたり　上田忠雄
昨夜あばれ南観音山静か　角野京子
【綾傘鉾】綾傘踊
綾傘鉾さても涼しき調べかな　藤英樹
綾傘鉾飛天の瞠涼しかり　近藤沙羅
清水さん偲ぶ綾傘踊見て　佐々木まき
鉾次々綾傘鉾を待つこころ　安藤久美
綾傘鉾傘の紅顔染めて　飛岡光枝
綾傘鉾ひよいと抱へて廻しけり　長谷川櫂
【伯牙山】
こんりんざい鳴らぬ琴なり伯牙山　飛岡光枝
【山伏山】

法螺貝に山伏山の動き出づ　飛岡光枝
【笛方】
兄弟のいづれ笛方太鼓方　飛岡光枝
【戻り鉾】戻り山
戻り鉾二つ並びてはしけやし　近藤沙羅
また一つ雨の中より戻り鉾　同
はるかより戻り囃子の鉦の音　同
業平の館の跡を戻り鉾　同
笛方のひとりひた吹く戻り鉾　岩根壽美
鉾町の路地いつぱいに戻り鉾　同
ひとまはり大きくなつて戻り鉾　同
ゆのし屋の庇の前を戻り鉾　中村汀
戻り鉾戸口に椅子を持ち出して　山本華子
戻り鉾榊こぼしてとほりゆく　本橋康子
大車輪目の前をゆく戻り鉾　同
誰彼に手を振りゆくや戻り鉾　上松美智子
戻り鉾団扇の風に送られて　同
柊屋黒塀の前鉾戻る　本谷厚子
見下ろして畏れ多くも戻り鉾　秋枝雪子
京中の厄を集めて鉾戻る　清田喜代子
軋みつつ軒の上くる戻り鉾　角野京子
屋根方は足で捌いて鉾戻す　澤田美那子
山鉾のもどりきつたるあとの風　大谷弘至
戻り鉾空から松をおろしけり　丹野麻衣子
もどり鉾からくれなゐの尾を引いて　玉置陽子
放浪の果ての姿の鉾帰る　上田忠雄
夏深き京の奥へ鉾帰る　同
ぬかるみし昔もあらん戻り鉾　飛岡光枝
古き良き新町通り戻り鉾　横山幸子
新町へよろけて入る戻り鉾　岡田忠孝
すみたればさつさと戻り囃子かな　長谷川櫂
【休み鉾】
お囃子の稽古絶やさず休み鉾　大塚直子

鷹山の翁さびたり鷹もまた　丹野麻衣子
禁門の変やこの方休み鉾　北側松太
休み鉾今こそ力蓄へん　安藤久美
力溜めよ今年こぞりて休み鉾　稲垣雄二
天空に月を預けて鉾休む　澤田美那子
応仁の乱にあらねど休み鉾　飛岡光枝

【鉾解き】

たちまちに長刀鉾の解かれけり　小川もも子
鉾解きて涼しき縄を貰ひけり　同
力あはせて鉾の車輪をはづしをり　近藤沙羅
今頃は鉾解かれをる頃ならん　同
鉾解いて急に明るき京の空　中村汀
二階より指示の声とび鉾を解く　清田喜代子
函谷鉾解きたる縄のうづたかし　安藤久美
鉾解かれ普段の町に戻りけり　井上次雄
長刀鉾解かれ横たふ真木かな　酒井きよみ
夏深く今年の鉾を解きにけり　上田忠雄
鉾解いてあすより盆の支度せん　藤英樹
外されて鉾の車輪の大いなる　長谷川櫂

【祭】

かりそめの祭提灯灯も侘し　佐々木まき
祭なき都大路をぶらぶらと　長谷川櫂

【祭髪】

一本のガラスの花を祭髪　飛岡光枝
夕顔の花ほぐれてや祭髪　長谷川櫂

【夏】

町中が手持ちぶたさや京の夏　稲垣雄二
御霊会や京は静かな夏の底　澤田美那子
月が揺れ長刀が揺れ古都は夏　三木紀幸
水色の菓子の包みも夏らしく　長谷川櫂

【夏菓子】

これがかの京の夏菓子笹の露　佐々木まき

【梅雨】

荒梅雨やあばれ観音閉じこめて　上田悦子

【喜雨】

喜雨浴びて曳子は声をいや高く　安藤久美

【炎天】

大車輪ささら打ち敷く炎天下　佐々木まき
炎天やまんじりともせず大車輪　飛岡光枝
炎天の男美し鉾の上　長谷川櫂

【土用】

土用餅黒き頭を並べたる　長谷川櫂

【台風】

台風や夫の大傘借りてゆく　木下洋子
台風一過祇園句会のうれしさよ　坂元初男

【雲の峰】

いや高く上がる真木や雲の峰　岩根壽美
汀さんの祇園歳時記雲の峰　飛岡光枝
京都御所木立の奥の雲の峰　長谷川櫂

【夏の月】

めでたけれ京に二つの夏の月　齋藤嘉子

【流星】

星飛んで今宵親しき東山　山田寿美子

【暑し】

屋根方のさぞ暑からん命綱　田宮尚樹

【涼し】

京の菓子名も涼しさの氷室かな　上田忠雄
鬼どもの涼んでゐるや京の闇　安藤久美
茅の香の涼しやここぞ御旅所　同
琴ひとつその他一切涼しけれ　中村汀
涼しさの草鞋の足の過ぎゆけり　横山幸子
菊の露養ふ命涼しかり　木下洋子
笛の音の笛を飛び去る涼しさよ　長谷川櫂
長刀鉾一本立てて涼しけれ　同
白玉の顔を並べて夕涼み　同

【暑気払ひ】

一心に俳句作るも暑気払　木下洋子

【夏祓】

西国にのたうつ龍を夏祓　長谷川櫂

【汗】

曳方の玉の汗こそ尊しや　佐々木まき
玉の汗蘇民将来の子孫なり　長谷川櫂

【髪洗ふ】

宵宮の人にもまれし髪洗ふ　飛岡光枝

【土用】

京にゐて土用に入りぬ土用餅　長谷川櫂
ぐるぐると土用鰻を八幡巻　同

【打水】

打水や奥に奥ある京の家　佐々木まき
水打つて鉾町の闇鎮めけり　稲垣雄二
水打つて奥までつづく京の家　安藤久美
賀茂の水打つ一杓に鬼は散る　同
屋根方や空のまほらに水を打つ　上田悦子

【川床】

川床で飲む名も鴨川や冷し酒　きだりえこ

【簟】

川風や二間つづきの簟　安藤久美

【鱧】

鱧食うて棒ふりばやし見にゆかん　大谷弘至
落し鱧喰はねばこころ定まらず　丹野麻衣子
鱧を焼く匂ひまとふや門提灯　越智淳子
切り落とす鱧の眼の涼しかり　斎藤真知子
鱧茶漬京の一日を冷ますべく　川辺酸模
疫の世も鱧の骨切り威勢よく　齋藤嘉子
とびきりの大輪なりき牡丹鱧　木下洋子
べつぴんの鱧の花咲く椀の中　飛岡光枝
祭鱧食べずに一つ年取るか　稲垣雄二
鱧の花氷の上におかれけり　同
包丁の一閃ありて鱧の花　上田忠雄

鱧切つて三日三晩の暑さかな　同
涼しさを器に鱧の落しかな　同
宵山やからりと揚がる鱧の骨　上田悦子
鱧の椀牡丹の花の如くあり　同
鱧焼いて京の祭を始めけり　同
さくさくと鱧切る音や荒格子　横井初恵
湯引かれて鱧は真白き花となる　三木紀幸
鱧食うて今日一日は京の人　きだりえこ
巡行を寿ぐはものおとしかな　同
包丁や花と開きて鱧の骨　長谷川櫂
鱧喰うて何やらはかなごころかな　同
熱湯の地獄に鱧を落しけり　同
座敷ごと冷してありぬ落し鱧　同

【鮎】

目も鼻もなくて涼しき鮎の菓子　飛岡光枝
焼鮎や丹波の道は石ばかり　長谷川櫂

【鰻】

浅き桶涼しくうねる鰻かな　長谷川櫂

【水羊羹】

三日月の手拭ひを添へ水羊羹　飛岡光枝

【水饅頭】

青笹をはらりととけば水饅頭　玉置陽子

【葛饅頭】

岩倉の笹の青さよ葛饅頭　岩根壽美

【かき氷】

うるはしき宇治のまみどりかき氷　佐々木まき
屋根方にかちわり氷振る舞はん　坂元初男

【心太】

鴨川を啜るここちや心太　上田忠雄

【葛焼】

葛焼に白雨のすじの二三本　長谷川櫂

【射干】檜扇

射干のうしろ坪庭しんとあり　山本華子
射干のうしろ誰が袖屏風なる　中村汀
檜扇に塵一つなき町家かな　近藤沙羅
檜扇や家の玄関仄暗く　清田喜代子
檜扇が咲けば祇園会みにゆかん　坂元初男
射干を一升盃に活けてあり　稲垣雄二

【桔梗】

笹ゆりも桔梗の花も舞妓かな　長谷川櫂

【茄子】

水茄子の一本漬や京暑し　本谷厚子
妻留守の茄子の輪切りの一夜漬　土佐欣哉

【胡瓜】

鉾囃子聞いて太りぬ大胡瓜　横山幸子

【瓜】

冷し瓜みやこの水に冷されて　伊藤昭子
世は変はり祭も変はり瓜を揉む　澤田美那子

【夏帽子】

夏帽子香を商ふ店に入る　佐々木まき

【浴衣】

横町の老いも若きも鉾浴衣　山本華子
鉾見遣るあやめ模様の浴衣かな　同
浴衣の子ならびて粽どうどすか　梅田恵美子
鞆とらぬ鉾の浴衣も二年に　澤田美那子
巡行は無けれど一日鉾浴衣　飛岡光枝
棒切れの手足がぬつと鉾浴衣　同
月一字染める浴衣や腰に笛　稲垣雄二
夕風に吊られしままの浴衣かな　斎藤真知子
今日だけは男あがめて浴衣ぬふ　辻奈央子
宵山のこの夜のための浴衣かな　夏井通江
鉾の縁浴衣の尻を並べたる　長谷川櫂
浴衣きて一夜の花の娘かな　同
ラグビーの少年らしき浴衣かな　同
子を生みて豊かに着なす浴衣かな　同
父母の愛かぎりなく藍浴衣　同
一筆で描くへうたんの浴衣かな　同

【羅】

羅や美しけれど知らぬ人　長谷川櫂
羅や執念き人とみゆれども　同
羅の衿がつくりと抜きにけり　同

【昼寝】

素戔嗚尊や令和二年の大昼寝　きだりえこ

【簾】

鴨川へ茶屋は簾を並べけり　佐々木まき

【葭障子】

葭障子越しに眺めて昔めく　近藤沙羅

【団扇】

沈黙す稚児あふぐべき大団扇　近藤沙羅
鉾団扇方と波打つ大路かな　河本豊
この雨の上れば別れ団扇かな　長谷川櫂
長刀の長の一字を団扇かな　同

【蚊遣香】

須佐之男も宵寝するらん蚊遣香　澤田美那子

【蜩】

かなかなの心に沁むや京の夕　上松美智子

【夕立】

大夕立三十六騎みなふるふ　安藤久美

【涼し】

神在すほの暗闇の涼しさよ　長谷川櫂

【蝉】

油蝉真木の松にとまりけり　上田悦子

【扇】

太陽と月を扇の裏表　長谷川櫂